

和仏法律学校講義録

秋山, 雅之介 / 田中, 遜 / 鶴, 丈一郎 / 松本, 烝治 / 加藤, 正治 / 齋藤, 十一郎 / 鶴見, 守義

(出版者 / Publisher)

和仏法律學校

(巻 / Volume)

10

(号 / Number)

高等科

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

1903-05-31



（昭和三十一年十一月四日第三種郵便物認可）
（昭和三十一年十一月四日第一日）
（昭和三十一年十一月五日）
（昭和三十一年十一月六日）
（昭和三十一年十一月七日）
（昭和三十一年十一月八日）
（昭和三十一年十一月九日）
（昭和三十一年十一月十日）
（昭和三十一年十一月十一日）
（昭和三十一年十一月十二日）
（昭和三十一年十一月十三日）
（昭和三十一年十一月十四日）
（昭和三十一年十一月十五日）
（昭和三十一年十一月十六日）
（昭和三十一年十一月十七日）
（昭和三十一年十一月十八日）
（昭和三十一年十一月十九日）
（昭和三十一年十一月二十日）
（昭和三十一年十一月二十一日）
（昭和三十一年十一月二十二日）
（昭和三十一年十一月二十三日）
（昭和三十一年十一月二十四日）
（昭和三十一年十一月二十五日）
（昭和三十一年十一月二十六日）
（昭和三十一年十一月二十七日）
（昭和三十一年十一月二十八日）
（昭和三十一年十一月二十九日）
（昭和三十一年十一月三十日）

明治三十六年五月三十一日發行

三十六年度 高等科ノ十

和佛法律學校講義錄

號貳廿百第

和佛法律學校

高等科第十課目次

ナ備船契約ナル文字ヲ用ヒタリ俗ニ辭フ賃手ヨリ其觀以ル賃切契約稱手ヨリ其觀
 ナリ賃切契約ナリ元來此「チャーター」ト云フ下ハ契約其モノト名稱ニ非スシテ
 該契約ヲ書キ表ハセル書面ヲ名ナリ即チ其始メ「羊皮紙」契約ノ條項
 ヲ認メ之ヲ上ヨリ下ニ就文字若クハ形象ノ部分ヲ中觀シ當事者雙方ノ所持
 シ後日争ノ起リタル場合ニ之ヲ接キ合セテ立證ノ具ニ供シ以テ詐偽の文字ヲ
 記入等ヲ防キタルナリ是レ即チ該契約ノ名稱ノ起因ニシテ也「他」按印
 アル證書「義」分ツノ義ナリ故ニ備船契約ト云フカ如キ意味ハ蓋モ其
 内ニ包含セスト雖モ因習ノ久シキ緣ニ契約其者ノ名稱ト化シ去レリ（此名稱ノ
 由來ニ付テノ若證ハ最モ先キニ「クレーラック」ノ海上慣習ノ著書ニ出テ後ホルド
 「」ノ裁判所長「ベリリー」之ヲ其判決文中ニ引用シ爾後「アボット」「ボチニー」等殆ト
 總テノ海法著書中ニ記述セララルニ至レリ（*Dejaribus III, P. 408*）

二 備船契約其モノノ沿革 前述セル如ク「チャーターパーチー」ハ其初メ書面
 ノ名ナリシモノ後ニ至リテ契約自身ノ名稱ト化シ又其文字ノ意義ニ積ナルモ
 複本契約ノ意タリ故ニ備船契約第一次ノ發達ニ於テハ複本要式契約ナリシカ

如ク「」氏ノ如ク「」説ヲ引キテ備船契約ハ法律史上複本
 契約ノ根原の標本（*Original type of contract*）ト云フ（*Dejaribus, III, P. 400*）然レトモ書面
 ノ作成ハ果シテ契約成立ノ要件ナリシヤ否ヤ或ハ單「證據」ヲ爲メナリ又ヤ否
 ヤ予ハ之ニ付テ多少疑ナキ能ハス其理由ハ「」ノ海法ハ世人ニ以テ世界最古
 ノ成文海法ナリト認ムル所也「」其第十九條ヲ見ルニ備船契約ハ書面
 ニ依ラズ口約ノミニテ成立シ得ルコトヲ豫想シ口約ノミニテ備船契約ヲ爲レ
 備船者カ手附ヲ拂ヒ置キタル場合ニ若シ備船者其契約ヲ履行セザルトキハ
 彼ハ其手附ヲ失セ若シ船船所有者若クハ船長其契約ヲ破ルトキハ其二倍ヲ返
 還セザルハ「」（*Parlemens, Collection de lois maritimes, 246; Beavers, Lex*
maritima, P. 187）蓋シ手附ハ契約成立ノ最モ有力ナル證據ナリ故ニ立證ノ爲メ
 書面作成ノ必要ナカリシナラン然ラハ則チ「」ノ海法時代於テ既ニ備船契
 約成立ノ爲メ必スシモ書面ヲ必要トセシ他ニ立證ノ方法ヲ其レニテ足レ
 ルモノナルモノトヲ推知スルヲ得ルハ故ニ予ハ備船契約其發達ノ始メ書面ヲ
 必要トスル要式契約ナルヤ否ヤ付テテ今少ク疑ナク存者也「」

時京師に於て法律學經濟學ヲ併セ見タリ内外商業ノ發達アリ又大阪に於て本國會議議決スルモノ亦法律經濟併ニ研究スル學術雜誌ナリ其發達並ニ法律學經濟學ノ分科編輯ニ過キテ餘ヲ遺テ固ニ法律の現象ヲ説明スルニ往々背棄ヲ失スルコトアルヲ以テ今復タ二者接近スルニ至リタル新傾向ナランカ予カ今茲ニ備船契約ニ付テ經濟的の方面ニ觀察ヲ爲スモ多少其趣意甚チト雖モ予テ該契約の經濟的の發達ヲ並ニ詳述セント欲スルモノニ非ズ何トカ以テ之ヲ詳述セントセハ海商全部ノ發達ヲ詳述セントヘカスラレバナリ是レ予カ本論ノ目的ニ非ズ故ニ予ハ單ニ該契約發達ノ趨勢ノリヲ記述スルニ止メントス

海商全部ノ發達ニ付テハ和佛法律學校明治三十二年度拙著海商法律學第一章參照(一)ノ譯キムハハズ然レモ單ニ此ノ譯ニ依テ該契約發達ノ趨勢ヲハ八抑モ運送契約(海運學)ノ所謂補助的の商行爲ナリ補助的の商行爲ハ固有ノ意義ニ於テ然商行爲ノ發達ハ其後ニ非ズ其ノ存在ニテナルコト明カナリ尤モ稍々進歩シタル域ニ在リテハ互ニ因果ヲ關係ヲ成シテ進歩發達スルコトハ固ヨリ言ハヌ埃者ス故ニ運送營業ナルモノハ頗ル後世ノ發達ニ屬ス航海事業其モノハ極

テ古來運送發達シタルニ相違ナシ然レトモ是レ皆外國貿易ニ從事スル商民等自ラ船船ヲ所有シ自己ノ船船ニ自己ノ貨物ヲ積載シテ貿易の途徑ヲ爲シ外國ニ向テ航海スルナリ故ニ新時代ニ於テ他國ノ物品ヲ積載シ運送價ノ高ク其所得トシ運送ノミヲ専門トスル所謂運送營業者ナル者ハ之アラザルナリ故ニトモ新時代ニ於テ既ニ運送契約ニ非ズ船船ヲ賃借ナルモノ先ツ胚胎スルハ自然ノ數ナリ何トナレハ商人或方面ニ向テ貿易の企業心ヲ有スルニ感シ其實力ニ乏シテ自ラ船船ヲ所有セザルコト往之タル以テレハナリ故ニ其始メ今日ノ運送事業ニ必ズシテ其ノ效力ヲ同ニシテ今日所稱船船賃借契約ナルモノハ先ツ往シタルナリ然レモ貿易進ニ經濟的の方面發達スルニ從テ船船ノ賃借ノモノヲ獨立ノ營業ト爲コト得ルニ至リ船船所有者ハ船船ヲ積載シ船員ヲ之ニ乘組シテ航海分得ルノ準備ヲ爲シ船船以テ世ノ需ニ應スルニ至レリ是レ即テ備船契約ナリ然レモ其初メ同一方面ニ向テ貨物ヲ運出ス所ノ商人亦其數多カラズ船船自體餘ク大ナルナルニ故ニ全部備船ノ場合極ク多ク其ノ爲メニ運送事業外國貿易ノ事業盛

一、爲之同一方面に出荷品者モ漸ク増加シ船舶ノ構造モ亦益々大ニ進歩シ
 タ一商人ノ貨物ハ二三ノ船舶ニ運送スルニ足ラズ是爲於テ大部船舶ハ
 一ノ船舶ヲ其ノ歩進モタルモノ與今日普通運送行商ノ運送契約ハ一船舶
 一船舶ヲ運送スルニ限リテ目的トスル契約ナリ運送令其ノ域中在リ又ハ運送契
 約ト云フハ船舶運送物品ヲ運送スル場合ヲ意味スル位ナシテ船舶運送契
 約一部份ノ儲蓄契約ハ御用船隻ニ於テ稀ニ見ル位ニシテ概シテ例外ト爲スル新
 タラ要スル船舶賃借ノ經濟的沿革ヲ述フニハ船舶賃借契約船舶契約其中
 一ヲモ全部儲蓄契一部份儲蓄契ニ備シテ物品運送契約ト云フタ如キ順序ナ
 敷運送契約モノト云フナク然レトモ最モ何處ニ地方在リテ非常ニ此ノ
 如キ順序ヲ蹈テタテ下云フモ非ス唯運輸的發展ニ運送ニ兼此ニ在リト云フ
 ニ在リ其關係ハ運送ハ一專門ナクハ運輸發展ニ伴テハ其ハ一ト云フ
 四代船舶契約立法ヲ將來ノ前途ニ如ク現時ノ經濟的狀態於テ兼テ儲蓄
 契約其實例極ク少ク全後航海事業益々進歩シ船舶之益々大ニ爲リ航海亦
 漸次定期航路ヲ取ルニ至リテ然レ儲蓄契約ナルモノハ其將漸ク實ニ備知スル所也

一、アリ然ルニ儲蓄契約ニ對スル我商法ノ立案ノ方法ハ能ク其當ヲ得タルヤ否ヤ
 能ク前述シタル社會ノ進運ニ伴フヤ否ヤ予ハ多少ノ疑ナキ能ハサルナリ元來
 我商法ハ獨商法ヲ母法ニ採リタルコトハ何人モ疑ハサル所ニシテ獨商法就中
 海商ノ部分ハ大ニ時勢ニ後レタル點アルコトハ獨逸學者間ニヌラ既ニ論争ノ
 アル所タリ之ヲ襲照シタル我海商法ノ時勢ニ後レタル點アルハ免ル能ハサル
 所ナリ何ヲカ時勢ニ後レタリト云フカ前述シタル如ク儲蓄ノ物品ヲ運送スル
 場合カ今日海上運送ノ常態タリ然ラハ則テ其最モ適用多キ最モ重要ナル場合
 一、原則トシテ立案スヘキナリ然ルニ獨海商法ニ我海商ハ之ト全ク反對ス
 ル最モ適用少キ儲蓄契約ノ場合トシテ立案セリ即チ我新商法海商編第
 三章運送第一節物品運送ト題セル規定ノ内容ヲ見ルニ第五百九十四條乃至第
 六百條ノ規定ハ船舶全部ノ儲蓄契約ノ規定ニシテ之ヲ一部份ノ儲蓄契約又ハ儲
 蓄ノ物品ヲ運送契約ノ目的トスル場合ニ準用セリ又第六百十三條以下三箇條
 一、於テモ全部儲蓄ヲ基礎トシテ規定ヲ設ケ第六百十六條又以テ之ヲ一部份儲蓄
 又ハ儲蓄ノ物品運送ノ場合ニ準用セリ要スル最モ適用多キ場合ヲ密ニ取リ

律師 何ホ一層法律的ニ書表ハスヘキ事ヲキテ利益ニ及キ...

主觀的ノ詞ナカ故ニ事ヲ請求ノ目的物トハ作爲又ハ不作爲ノ行爲ナリト... 生徒ノ結局作爲不作爲ノ中ニ包含セラルヘキ即チ被告カ拒ムモ判決ノ力...

裁判ノ新ニ被爲メシ者感關係ニ係ル關係ニシキニ意思ヲ陳述スル事ヲ... 第七百三十五條ニ依リテ雖モ今日ニ於テハ是レ通説ニ反ス...

依前コ本罪得テ非キハ然レテハ公判罪獄給セハイテ本罪トシテ
生徒ノ有夫姦罪ヲ犯シテ其罪ヲ免ルル性質ニ依リテ其罪ヲ免ルル事
被告訴ビ捕獲ニ因テ其責任ヲ停止セリトシテ捕入事即チ其罪ヲ免ル
講師 其性質トハ如何

生徒 本罪ノ場合ニ於テ強シク其利益ヲ保護セシトセハ其結果却テ私益ヲ害シ
其被害者ヲシテ損害ニ損害ヲ受ルル事ハ悉アルヲ以テ被告罪ト爲シタルモ
公判罪ハ綜合一旦告訴ヲ爲スト雖モ其取下ヲ許スニ非スハ法律ノ目的ヲ
超過スル事不能ハ於ル事ナリ然レテモ其性質ニ依リテ公判罪ノ取
講師 其答ハ可ナラン然ルニ學者或ハ此場合ニ於ケル告訴ノ取下ハ公訴提
後ナルトキハ最早許スヘカラス何トシテ公訴提起自檢事ノ職ニ屬シテ
行使シタル後ナルヲ以テ一人ニ左右セシムヘキモノニ非スト論スルハ正
當ノ說ニ非ス一人ニ權スル時將ク救済等ニ關スル事

講師 本夫ヲ告訴スル事ハ其性質ニ依リテ檢事ノ職ニ屬シテ其後本夫
ヲ死亡シタリトセハ公訴ノ運命ハ如何

生徒 告訴ヲ取下ケタル以上ハ公訴ハ續行ナルモノニシテ此場合ニ於ケル
本夫ヲ死亡シテ取下ケテ意思ヲ表示シタリト推定スルコトヲ得タルヘシ
講師 然レテ本夫ノ死亡ハ當然婚姻解消ノ結果ヲ生ス隨テ此場合ニハ最早
社會ノ罰スル必要ナキ事如何
生徒 不河ナリ元來有夫姦行親告罪ト爲ルルハ前ニ述及スル如ク本夫ヲ
家ニ職權ヲ以テ訴追セタルヲ規定セテ故ニ一ツモ告訴アリ訴追セタル以上
公判罪ニ依リテ其罪ヲ免ルル事不能ハ於ル事ナリ然レテモ其性質ニ依リテ
レハ凡沙人ノ意思ハ最後ノ意思ヲ以テ確定ノ意思ト看ルコトヲ得ヘク此場
合ニ於テハ最後ノ意思ニ告訴取下ケテ意思ヲ推定スルコトヲ得テ之ヲ以テ
講師 大君カ前同ニ答セタルトキハ本案裁判確定ニ至ル前ニ告訴人ハ告訴ノ意
思ヲ撤回コトヲ必要トスルコトヲ得タルカ如ク今告訴人ハ死亡シテ其時ヨリ事
實上告訴ノ意思ハ断絶スル事非キヤ何早キニ死亡シテ其意思断絶スル事
被告コトヲ得テ之ヲ如何トシテ公判罪ト爲リタルカ然レトモ予ハ前ニ述ヘタル答
生徒 予ノ議論ハ少シク薄弱ト爲リタルカ然レトモ予ハ前ニ述ヘタル答

捕者ノ同以捕獲ノ漁業中並國就捕船ハ海軍ニ於ケル行為ニシテ交戦者ハ其
 違反者ヲ罰シルハ半當耳單兵財產之ミテ沒收スルニ過キテトモ其差異ノ存ス
 ル所也蓋シ戰國ノ雙方ト第三國トハ戰争中平和關係ヲ保護スル所ハ亦カ故
 ニ中立國ト人民ハ交戦國ニ戰時禁制品ヲ運搬スル前能ハサルニ非ス其通商之
 自由才其結果トシテ兵器彈藥ト雖モ交戦者ニ之ヲ賣買セ海陸上ニ於テ之ヲ賣買
 者ニ運搬シ得ルカト同時ニ中立國ハ其販國內ニ以テ販賣商品ハ輸出ヲ禁
 ルノ義務ヲ負フカト一方則チ他方交戦者ハ其運搬ヲ爲ス中立國ノ船ハ
 海上ニ於テ其運搬物品ヲ沒收スル前能ハサルニ非カ故ニ其運搬
 物品運商品トシテ戰時禁制品之ハ其所有者ハ中立國人民トシテ交戦國間
 沒收セラレルノ危險スルニ過キテ之ニ反シテ亦亦中立國人民トシテ交戦國間
 ノ戰國行為ヲ助ケルニ於テ亦戰國行為ト從事スル敵人ト同一視セラレモ
 ナラズ故ニ對敵國ニ其行為自體ヲ不法トシテ處罰スルモノト云フ(二)戰時禁制品
 運到地カ交戦國又ハ交戦國ノ海陸軍カルコトヲ要ス交戦者之ヲ罰スル所
 仕テハ其運搬ニ從事スル船ノ到達地如何ハ其要件ナラズ拘ルカト戰時禁制

ノ運搬ニ於テハ同船船令到達地如何ニ依リ禁制品カ故ニ到達地無關係ナルト敵
 國戰國船カ禁制品運搬ノ間 禁制品カ故ニ戰時禁制品戰國ニ直接使用ノ物品ヲ
 交戦者一方ニ輸入スルモノカレトモ戰時禁制品ノ事業ニ於テハ必スシモ物品ノ
 運搬ニ關係者無キ交戦者ハ其戰時禁制品ノ運搬ニ及ビ之ヲ直接運搬禁制品カ故
 一戰時禁制品カ故ニ其運搬ヲ沒收スル前能ハサルカ故ニ其運搬ノ船ハ所有者亦禁制品
 於テ戰時禁制品カ故ニ之ヲ知得居居ル否ト又戰時禁制品戰時禁制品カ故
 一檢査船員ヲ於テ戰國行為ヲ補助スル行為カ故ニ其意思出カレバ亦禁制品
 要カ(四)戰時禁制品運搬ノ原則トシテ其運搬カ故ニ沒收シ船船運搬カ故
 外カモ反シ戰時禁制品運搬ノ原則トシテ其運搬カ故ニ沒收シ船船運搬カ故
 外カモ反シ戰時禁制品運搬ノ原則トシテ其運搬カ故ニ沒收シ船船運搬カ故
 以上ノ點關於テ戰時禁制品ノ事業ト戰時禁制品トハ全ク其性質ヲ異ニスルコト
 明カカ故ニ其運搬ノ在リ點亦區別イテ其性質ヲ異ニスルコト
 戰時禁制品カ故ニ戰國行為使用ノ物仲又敵水手中運搬禁制品カ故ニ其運搬カ故
 一戰時禁制品カ故ニ其運搬カ故ニ其運搬カ故ニ其運搬カ故ニ其運搬カ故ニ其運搬カ故

本問 被告ハ外國人ナリト雖本邦ニ在留セリ故ニ吾領土主權ニ服從シ刑法
 適用ニ應ジ然レモ該國アルモノトモ然ルニ在留ノ期某ヲ恐喝シテ此ノ點ニ
 付テ該國或ハ五百弗ノ銀行手形ヲ送ラヌンハ往テ家人ヲ監禁セントノ意思表示
 ハ所謂強盜罪構成要件ノ脅迫ニ該當ストノ議アルヲ據テ本問此ノ實體
 法上ノ問題ヲ解決スルニ非テ以テ該事件被告事件ニ付テ裁判所ハ管轄權アリ
 ヤ否ヤノ事ヲ訴訟法上ニ懸問シ解決スルニ在リト信認アリ以テ單ニ其ノ斷定
 ノミヲ揭テ財物ヲ騙取セシメテ強盗罪ニシテ罰スルニ以テ其ノ場合上海ニ於テ強盜罪
 恐喝狀ヲ見シテ強盜罪ノ著手ヲ行ハザルニ其ノ管轄權認メテ是レヲ被告送レ御
 某ノ手許ニ到達可キ所屬ヲ爲シタル時其於テ強盜罪ヲ著手アリヤ否ヤ著手前
 ノ見解ヲ取ルニ於テハ被告人ハ日本ニ在留スルモ日本國ニ於テ犯罪ノ豫備ヲ
 ナシタルニ過キナレハ吾刑法ハコレヲ恐喝取財未遂犯トシテ罰スルコトヲ得
 ス帝國司法裁判所ハ又探テ以テ審理判決スルコトヲ得サルニ至リ被告ノ管轄
 權ナシトテ抗辯ノ理由アリト雖手取ハ其ノ恐喝ノ意味ヲ有スル書狀ヲ認メテ
 コレヲ在上海郵某ニ到達シ得可キ所爲通常ハ郵便ニ付テシテナシタル時ニ於テ

犯罪ニ著手シテ強盜罪ノ成立ト斷定如何ト否ハハ強盜罪ノ財物ヲ騙
 取スルヲ禁ス而シテ恐喝狀ヲ發送シタルモノハ已ニ恐喝ノ意思表示シ終リタ
 ルモノナリ其ノ書狀ノ到達スルト又到達スルモ被害者カコノ書狀ヲ讀ミ得ル
 コト雖強盜罪者大ニ又讀カモ毫モ其怖生モ其ノ強盜罪ノ豫備ニ過キテ
 示ノ有無ニ干係セス已ニ恐喝ノ意思表示アリ而シテ恐喝ハ吾刑法ノ恐喝取財
 罪ノ構成要件ナリ犯罪ノ構成要件ニ著手ニ未遂犯ヲ構成スルヤ誠ニ明瞭ナリ
 ト云フヲ得可シ

或ハ其ノ恐喝狀右到達セザルヘカラサルヲ主張スルモノアランモコレ不通ノ
 論ナリ試テ對話問ニ於テ恐喝ノ重語ヲ發シ各其時如何論者其ノ重語ハ被害
 者ノ耳ヲ入ルル時以テ犯罪ニ至ラザルニ至ラザル者力ナク如何論者其ノ重
 喝ノ意思ヲ表示シテ正ニ刑法ノ禁制命令ヲ犯シ各其時如何論者其ノ重語
 ハヘカラス何レ其論決テ滑稽大ニ大法院強盜罪恐喝取財ニ未遂犯又論ニ依リ
 之苟モ恐喝ノ意思表示アリテ強盜罪ノ成立ニ至ラザル者力ナク如何論者其
 構成スル支障有レテ強盜罪以テ本論強盜罪ノ成立ニ至ラザル者力ナク如何論者其

ル所ヲ阻嚇セム蓋シ被害者ニ對スル恐喝ノ意思表示ハ恐喝取財未遂ヲ構成スルヲ知ルニ足ラン已ニ被告人ハ恐喝取財未遂犯人ナリ而シテコノ未遂ヲ所爲ハ本邦ニ在留中犯シタルモノナリ行爲ノ地ハ日本ニテ然ラハコノ外國人ニ對シテ吾刑法ヲ適用スルハ吾司法裁判所ノ權限ニ屬ス而シテ本問ノ檢察官被告人所在地ノ裁判所ニ公訴ヲ提起シタルヲ以テ裁判所ハ審理判決スル權アルハ明瞭ナリ故ニ被告ノ管轄權ナシトノ申立ハ理由ナレ從テ本文ノ如ク其ノ申立ヲ却下ス可キモノト信ス

本問題ニ付テハ左ノ如ク論スヘキモノナリト信ス
 裁判所ハ被告ノ管轄權ヲ申立ヲ却下シ本案ニ付テ審理裁判ヲ爲スヘキモノナリ
 其ノ理由
 帝國裁判所ハ管轄權ヲ有スルモノ以下ノ條件ヲ具備スルヲ以テ是レトス(一)

其ノ犯罪ハ帝國内ニ於テ犯シタルモノナリト此ノ點ニ付テ吾刑法ハ何等規定スル處ナキヲ以テ一國ノ法律ハ其領域ヲ越テ行ハレズトノ原則ニ從テ之ヲ論スル外ナレバ以テ帝國裁判所ハ帝國領域内ニ於テ犯シタル罪ニ非シハ管轄スルコトヲ得スト云フ可シ(二)帝國ノ特定ノ裁判所ハ管轄權ヲ有スルニハ刑事訴訟法ノ規定ル所ニ從ヒ犯人ノ所在地犯罪地逮捕地等ヲ管轄スル裁判所ナラザル可カラズ
 今本問ノ場合ニ於テ以上二個ノ要件ヲ具備スルキ否キ余輩ハ別ニ其ノ欠タル處ナキヲ信スルモノナリ本問題ニ付テ疑ハ起ル可キハ犯人ノ行爲ハ外國ニ於テ爲シタルモノニ非シヤトノ事之レナリ抑モ犯罪地トハ如何ナル場所ヲ指シヤ此ノ點ニ付テハ學說數多アリト雖余輩ハ犯罪構成要素ノ一部ヲ行ハレタル地ハ皆テ犯罪地ナリトノ説ヲ最モ正シキモノナリト信ス從テ本問ノ如キ書面ニヨリ行ハレタル犯罪ハ其ノ發信地及ヒ受信地モ共ニ犯罪地ナリト論シテ差同ヘナキモノナリト信スルモノナリ蓋シ犯罪行爲トハ其ノ犯罪要素ノ一部ニ著手スルヲ云フモノナルヲ以テ其ノ要素ノ一部處就地ハ悉ク犯罪地ナ

ト云フ得ベキナリ上述ノ所論ヨリテ觀リテ之ニ受領地及國大ニテ被告
 地ハ帝國内ナルヲ以テ犯罪地ハ帝國内ニテ然ラズトナリ從テ裁判所ハ管轄權
 ヲ有スルモノト論ジ得ベシ然レテ第二ノ條件ニ付テ欠ク處ナキニ否カ此ノ點ニ
 付テハ被告人所在地ノ裁判所ニ公訴ヲ提起シタルヲ以テ別ニ論ベキ間人亦
 以上論スル處ニヨリ決極主文ノ如ク論スヘキモ在テ此ノ點ニハ
 律師批讀右二通ニ對テ批讀右答案ニ於テ管轄權人申立又却下スル
 事本モノト解決シタルハ何レモ其當ヲ得ベシモノナリ其理由モ亦可ナリ蓋
 シ本問ノ場合ニ於ケル恐喝取財未遂ノ所爲ハ帝國ト外國トニ跨リ行ハレ
 タルモノナリ即チ我邦ニ於テハ被告人ハ恐喝ノ書頭ヲ懸念シテ被害者ト
 爲シ被害者發達シタルモノナリ其行爲ニ蓋手國及於テ人及テ外國ニ於テ
 被告大カ恐喝ノ書面ヲ送リテ結果被害者則チ之ヲ受取リ畏怖シタル事
 實實アリ而シテ此等ノ事項共ニ恐喝取財ノ一部又爲テ原因結果ノ關係ヲ
 成シテ不可分の性質ノモノナリ被被害者ハ假令ト外國ニ在リテ帝國ニ在リ

テ即チ外國ニ在リテ決斷其犯法行爲爲テ帝國ニ於テ犯罪ト爲ル
 惡事施得テ故ニ帝國裁判所ニ其犯法行爲ニ對シテ管轄權ヲ有スルヲ論
 斷シ得ルモノナリ其理由ハ本流並置ノ外國人及外國ニ在リテ犯罪ト爲ル
 事即チ犯罪ノ行ハレタル地ニ依リテ管轄權ヲ有スルモノナリ其理由ハ
 罪部ニ依リテ罪部獨立ノ點ニ在リテ然ラズ蓋シ管轄權ノ下置並置等事久ク古
 斷定シテ對テ然ラズ然レテ本問則チ管轄權ノ點ニ對シテ久ク古斷定シ
 裁判所ハ被告ノ申立ニ基キ管轄權ヲ有シ得ルモノナリ其理由ハ本流並置
 管轄權ノ由リテ然ラズ蓋シ管轄權ノ點ニ在リテ然ラズ蓋シ管轄權ノ點ニ在
 本問題ハ先ツ犯罪地ハ在上海ナルヲ將テ我日本領土内ナルヲ決定スル
 事即チ順序ナリト信ス蓋シ我カ刑罰訴訟法ニモルルニ依リテ管轄權ハ被告
 ノ所在地ト犯罪地ト二種アリテ犯罪地ハ裁判所ハ被告人ハ外國人又君主外交官
 如ク不可使權ヲ有スル者ニ非ラズ以上如何ナル場合ニモ裁判管轄權ヲ有ス
 ル被告人所在地ハ裁判所ハ當ニ必キ本裁判管轄權ヲ有スルモノナリ其理由ハ
 事即チ被告ハ被告人ハ外國人ニシテ外國ニ於テ外國裁判所ニ對テ犯罪行爲ヲ

商人ニ非ズルモノヲ代理論アルモノ以テ其要點ヲ導キ示スルモノトシテハ其要點ニ
 先期ニ商ニ付キ説キルモノ代理論商近時ノ發達ニ際シ法律制ニ由リ獨逸新商法
 始メテ之ニ關シテ詳細ノ規定附屬シ我商法亦之ヲ採リ獨逸商法並ニ草案
 並ニ其規定ヲ存シテ附屬ニ草案以テ之ヲ削除シ去リ我商法並ニ其代辦人
 ニ關スル規定ヲ爲セルモ新商法ハ之ヲ變改セシメテ事口獨逸商法ヲ模範ト
 セルナリ獨逸商法及ヒ我商法ニ依リテ代理商ハ僱用人ト非ズ然レテ一宛ノ商
 人ノ爲メニ平常其商業ノ部類ニ屬スル商行爲ノ代理又ハ媒介ヲ爲ス者ニシ
 テ商行爲ノ代理ノ引受又ハ仲立ニ關シテ其商行爲ヲ爲スル者ナルヲ以
 テ獨立ノ商人タリ故ニ商業使用人ト代理商トハ其商人ノ營業ヲ補助スル機
 關タル點ニ於テハ一致スレトモ其獨立ノ商人タルト否トノ點ニ於テ異ルモ
 ノナリ

代理商ハ商人ニ非ズルモノト論定シ(一)代理商ニ關シテ商行爲代理又ハ媒
 介ヲ爲ス者ト謂ヒテ業トシテ平常其規定ニ依リ(二)代理商ニ關シテ商行爲代理又ハ媒

商人トシテ之ヲ代理論本邦ノ商法並ニ其要點ヲ導キ示スルモノトシテハ其要點ニ
 先期ニ商ニ付キ説キルモノ代理論商近時ノ發達ニ際シ法律制ニ由リ獨逸新商法
 始メテ之ニ關シテ詳細ノ規定附屬シ我商法亦之ヲ採リ獨逸商法並ニ草案
 並ニ其規定ヲ存シテ附屬ニ草案以テ之ヲ削除シ去リ我商法並ニ其代辦人
 ニ關スル規定ヲ爲セルモ新商法ハ之ヲ變改セシメテ事口獨逸商法ヲ模範ト
 セルナリ獨逸商法及ヒ我商法ニ依リテ代理商ハ僱用人ト非ズ然レテ一宛ノ商
 人ノ爲メニ平常其商業ノ部類ニ屬スル商行爲ノ代理又ハ媒介ヲ爲ス者ニシ
 テ商行爲ノ代理ノ引受又ハ仲立ニ關シテ其商行爲ヲ爲スル者ナルヲ以
 テ獨立ノ商人タリ故ニ商業使用人ト代理商トハ其商人ノ營業ヲ補助スル機
 關タル點ニ於テハ一致スレトモ其獨立ノ商人タルト否トノ點ニ於テ異ルモ
 ノナリ

商人トシテ之ヲ代理論本邦ノ商法並ニ其要點ヲ導キ示スルモノトシテハ其要點ニ
 先期ニ商ニ付キ説キルモノ代理論商近時ノ發達ニ際シ法律制ニ由リ獨逸新商法
 始メテ之ニ關シテ詳細ノ規定附屬シ我商法亦之ヲ採リ獨逸商法並ニ草案
 並ニ其規定ヲ存シテ附屬ニ草案以テ之ヲ削除シ去リ我商法並ニ其代辦人
 ニ關スル規定ヲ爲セルモ新商法ハ之ヲ變改セシメテ事口獨逸商法ヲ模範ト
 セルナリ獨逸商法及ヒ我商法ニ依リテ代理商ハ僱用人ト非ズ然レテ一宛ノ商
 人ノ爲メニ平常其商業ノ部類ニ屬スル商行爲ノ代理又ハ媒介ヲ爲ス者ニシ
 テ商行爲ノ代理ノ引受又ハ仲立ニ關シテ其商行爲ヲ爲スル者ナルヲ以
 テ獨立ノ商人タリ故ニ商業使用人ト代理商トハ其商人ノ營業ヲ補助スル機
 關タル點ニ於テハ一致スレトモ其獨立ノ商人タルト否トノ點ニ於テ異ルモ
 ノナリ

余等先ツ商業使用人併ニ代理商ノ性質ヲ略述シ以テ兩者ノ區別ニ及ハント
 ス 第一 代理商ニシテ其ノ權限ハ主として文中記載ノ限ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトニ在リ
 第二 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第三 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第四 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第五 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第六 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第七 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第八 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第九 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第十 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ

第一 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第二 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第三 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第四 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第五 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第六 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第七 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第八 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第九 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ
 第十 代理商ハ其ノ權限ヲ行使スルニ當リ其ノ權限ノ外ニ於テ其ノ權限ヲ行使スルコトヲ得ズ

七十二條三項ヲ以テモントス即チ父母共ニ家ヲ去リ居ル時ハ未成年者ハ其後
 見人及親族會ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス然レバ則チ居家ノ場合ニ於テ其未成年
 ノ子ト父母トカ其家ヲ同シクシテ居ルニ於テハ其後見人及親族會ノ同意ヲ
 去ラザル時ハ後見人及親族會ノ同意ヲ得ルヲ要ス未成年ノ子カ其家ヲ去リタ
 ル場合ニ於テハ單ニ後見人ト同意ヲ得ルニ足ラズトハ蓋ニ法律精神ナクシヤ況
 シヤ婚姻又ハ離婚カ人生ニ最重要事タルニ於テ才力及人眼ヲ起シテ居人ト
 未成年ノ子カ協議上ノ離婚ヲ爲ス場合特別ニ說明ヲ要セザル科裁判上ノ離婚
 ヲ爲サントシ離婚ヲ訴テ提起スルニハ其後見人即法定代理人ト同意ヲ得ルヲ
 以テ足レリ是レ民法ニ於テ協議上ノ離婚ニ對シテハ特別ニ決定セルニ反シ裁
 判上ノ離婚ノ場合ニハ何等別殊ノ規定ナクシテハナリ然レバハ其後見人ト
 一併即批評ヲ答案者カ第七十二條第三項ノ精神解釋上本問ノ場合後見
 人及親族會ノ同意ヲ要スルコトタルニ疑ハズ同條理ニ子カ分家等ノ固
 本問ノ其家ヲ去リタル場合ヲ包含セザル如ク規定セザルハ畢竟法律ノ解釋ナ
 ルハシ

但書裁判上ノ離婚ニ付テハ人事訴訟手續法第三條ヲ無効力者カ婚姻關係無
 效若クハ取消離婚又ハ同居ニ關スル訴訟行爲ヲ爲スニハ其法定代理人保
 佐人又ハ夫ノ同意ヲ得ルコトヲ要セズトアルヲ以テ未成年者カ裁判上ノ
 離婚ヲ爲スニ付テハ其後見人ト同意ヲ要セザルヲ明カナリ

支角 仲 藏

本問題ニ答フルニ當テハ先決問題トシテ先ツ本問ニ於テハ未成年者ノ法律上
 ノ地位如何ヲ研究シ而シテ後本問ノ如キ場合ニ於テハ果シテ何人ト同意ヲ要
 スルヤヲ論ゼント欲ス

第一、本問ノ場合ニ於ケル未成年者ノ法律上ノ地位如何トハ其後見人等ト
 未成年ノ子カ分家ヲ爲シタル場合ニ於テハ一家ノ戶主タル身分ヲ取得スル
 ト同時ニ父母ノ親權ヲ服シタルモノトシテ其後見人等ト同意スルニ依リテ
 家族カ分家ヲナシタルトキハ一家ヲ創立シ本家人家族タル地位ヲ失フニ
 シテ新ニ立テタル家ノ戶主タル身分ヲ取得スルニ特ニ注意スルモノナシ

只何カ故ニ其父母ノ親權ニ服セザルヤト云テ略シテハ一言説明スルニキ
 必要アリト信ス抑モ民法八百七十七條ニ規定スルニ其家ニ在ル親權
 ニ服ス云云ト即チ親權ニ服スベキ子ハ其父母ト家ヲ同ノスルコトヲ要件ト
 セリ茲ニ於テカ若シ未成年ノ子カ分家ヲナシテ其家ニ在ル親權ニ服スル
 親權ニ服スルコトヲナキ其當然ノ結果ナリ何カ故ニ子ハ其父母ト家ヲ同
 ノスルコトヲナシテ分家ニ在ル親權ニ服スルコトヲナキ

第二本問ノ場合ニ於テ未成年ノ子ハ果シテ何人ノ同意ヲ要スルヤト問
 余ハ本問ノ場合ニ於ケル未成年ノ子ハ何人ノ同意ヲ要スルコトハ民法
 ト信ス其理由左ノ如シ

- 一、家族カ婚姻ヲナサントスル場合ニ於テ戸主ノ同意ヲ要スルコトハ民法
 七百五十條ノ規定スル處ナリ然レトモ分家ノ戸主ハ一旦戸主タル身分ヲ
 取得スル以上ハ本家ノ戸主ヨリシテ何等カ拘束ヲ受ケルモノナラズ故
 ニ本家ノ戸主ノ同意ヲ要セス
- 二、未成年ノ子カ婚姻又ハ協議上其離婚ヲ求メ其家ニ在ル父母ノ同意

又若シ同意ヲ得ル能ハザルヤハ其一方又ハ後見人及ヒ親族會ノ同
 意ヲ得ルコトヲ要ス然レトモ本問ノ場合ニ於ケル未成年ノ子ハ父母ノ同
 意ヲ得ルヲ要セス何トナレハ分家ヲナシタルモノナルヲ以テ其父母ト家
 共ニ異ニスレハナク其家ニ在ル親權ニ服スルコトヲナキ其當然ノ結果ナリ
 三、實際上ノ便宜ヨリシテ反對論ヲ採リテ或ハ父母ノ同意ヲ要スルカ如ク
 解釋スルモニアラシモ別ニ之ニ關シテ何等カ法律規定ナキ以上ハ何人ノ同
 意ヲ要スルモモスト解セザルヘカラスト信シ本問出題者ノ意思ハ何人ノ同意
 ヲ要スルヤト云タルヲ以テ余ノ答案ニ或ハ其問題ノ範圍外ニ逸スルヤノ
 觀アリ然レトモ余ハ以上ノ如ク解スルヲ以テ敢テ其所信ヲ茲ニ開陳スル
 事モナク其家ニ在ル親權ニ服スルコトヲナキ其當然ノ結果ナリ

講師批評 未成年ノ子カ分家ヲ爲シタル時キハ父母アルモ父母ト家ヲ同
 フセザルヲ以テ婚姻離婚等ノ場合父母ノ同意ヲ要セザルハ答案者ノ意見
 ノ如シ然レトモ第七七十二條第三項ニ依リテ同意ヲ爲スルハ父母ノア
 ラザル時キハ後見人各親族會ノ同意ヲ得ルヲ要スルノ趣旨アル所明カ

ナルヲ以テ本例ノ場合同條項ノ規定ニ依リテ得ルモノハ其理由ヲ說明セ
タルヘカラス直チニ何人ノ同意ヲ得ルヲ要セ同條ノ規定ニルハ不可ナリ
トシテ

第三 夫カ死亡シ又ハ其家ヲ去リテ子カ家督相続ヲ爲シタル後ハ其家督同
寡婦ヘ其家ニ在リテ夫ヲ迎フルヲ得ヘキヤ如何

本問題ヲ決スルニハ先ツ婚姻ノ種類並ニ其效力ニ付テハ首ヲ示シ得ル
婚姻ニ凡ソ三種アリト信ス即普通婚姻入夫婚姻所養子之ナリ
普通婚姻ハ普通ニ夫カ婦ヲ迎フル場合ニシテ世間ノ實際ニ於テ尤モ多ク行
ル者ナリ而シテ其效力トシテ妻ハ夫ノ家ニ入ルヘキ者ナリ
次ハ入夫婚姻ニシテ女戸主カ婚姻ヲナス場合ニシテ此婚姻ノ效力トシテ夫
カ妻ノ家ニ入ルヘキ者ナリ
第三ハ婿養子ニシテ養親カ養子縁組ヲナス時ニ養女ニ結婚セシムル者ナ
リ而シテ此場合ニ於テハ家督ヲ承継セシムル目的ヲ以テ夫トアリ或ハ單

ニ女婿トスル場合アリ何レモ夫カ養家ニ入ルヘキ者ナリ
此ノ以外ニ認ムル婚姻ノ種類ナシ然ラハ本問題ノ場合ハ何レニ該當シテ普通
夫ヲ迎フルコトヲ得ヘキヤ
普通婚姻ニヨリテ夫ヲ迎フルコトヲ得ヘキヤ曰ク然ラハ普通婚姻ノ其效力キ
シテ妻ハ其夫ノ家ニ入ルヘキ者ニシテ本問題ノ場合ハ妻ノ家ニ夫ヲ入レントス
ル場合ナレハ普通婚姻ヲナシコトヲ得ス換言スレバ本問題ノ場合ニ妻カ婚姻ヲ
ナサン時欲セハ夫家ニ入ラサルヲ得ル問題ハ他家ニ入ラスルヲ得ル現在ニル
家ニ於テ婚姻スルコトヲ得ルヤ否アレハ普通婚姻ハ本問題ノ場合ニ該當セス
然ラハ余カ第ニ種トシテ婿カタル入夫婚姻ニヨリテ夫ヲ迎フルコトヲ得ヘキヤ
入夫婚姻ハ女戸主カ夫ヲ迎フルコトヲ云フ者ニシテ本問題ノ場合ニ寡婦カ女戸主ニ
非ス何者亡夫ノ遺子家督相続ヲナシテ現ニ戸主トシテハ故ニ入夫婚姻ニヨ
リテ夫ヲ迎フルコトヲ得サルハ毛頭疑ナク更ニ進シテ余輩カ婚姻ノ第三種ト
シテ婿カタル婿養子縁組ヲナス時此寡婦カ夫ヲ迎フルコトヲ得ルヤ此點ニ於
テハ絕對的ニ夫ヲ迎フルコトヲ得ルトモ又得ストモ解答スルコトヲ得ス先ツ

余は何れも中誠實に以て信託關係云々又稱養子トセテ其婚嫁爲メ夫ヲ迎スル
 此等ノ事得ルニ當リ其ノ旨ハ判明無缺トシテ之ヲ免却シテ其處場合於
 ケル養子トシテ他ニ家督相續ヲ爲メテ其婚嫁ノ子アリト以テ相續ノ目録
 トスル等養子非シテ其ノ單ニ女婿ナリトシテ周知ノ屬ヲ容レテ其ノ旨

多クノ場合於テ妻カ寡婦トナル原因ハ夫カ死亡シ又ハ其家ヲ去リタル場合
 ナリ而シテ之等ノ場合ニ子カ家督相續ヲ才得タルトキニ於テ子カ爲メハ其
 所妻カ寡婦トナラテ猶其家ニアル以上ハ家督相續後戶主トシテ子ヨリ見レハ明
 ニ家族タリ之レ七百三十二條ノ明規スル所ナリ合ニ其意ニ背テ其ノ旨
 然リ而シテ已ニ其家ニアルトシテ戶主カ家族タル以上ハ婚嫁ヲカスルニ戶主カ同
 意ヲ得ル之ヲ主キトシテ得ヘシ之レ七百五十條ニ規定ス法文ハ之ヲ明規シテ
 點ヲ疑フ容ナク其旨ナリ而シテ戶主カ其權利ヲ行フニ當リ其旨トシテ其旨
 ニ背シテ親權ヲ行フ者又ハ後見人タル者アルトキハ其旨カ之ニ同意ヲナシ然

ラテアルトキハ親族會之ヲ行フハ元ヨリ七百五十一條ノ明規論ヲ待タナル所ナ
 リ
 以上ハ吾人ノ積極說ヲ證スヘキ法律上ノ理由ナリ然レニ之ヲ實際ヨリ見レハ
 如何巴ニ法律カ吾人ノ積極說ヲ證明スル以上ハ實際上ノ見地ハ必要ナキ如
 シト雖猶之ヲ完整タラシメシカ符ニハ弱チ之ヲ廢スルニ要セスト信ス而シテ
 又問題カ實際ト必要ニ當リテ親族的問題タラシメナリトシテ其旨カ之ニ背
 思フニ妨礙ヲ起スル幾干ナラナル婦女カ夫ヲ迎ヘテ年ヲ閱スルコト少ナルニ
 一家ノ紛争ハ遂ニ夫ヲシテ家ヲ去ルノ止ムナカラシメ又ハ不時ノ疾病ニヨリ
 テ夫ハ死亡スルニ至ヒタルトキニ形見ノ愛兒ハ幸ニ其後ヲ受ケルニ足リタ
 一家ノ獨立ハ蓋支カキ如シ然レトシテ其旨カ之ヲ廢スルニ限局スルモノ
 ラシメテ其旨カ之ヲ廢スルニ限局スルモノハ法ハ人情ヲ曉シテ其旨カ之ヲ廢
 シテ當リ得タル所ナリ其旨カ之ヲ廢スルニ限局スルモノハ法ハ人情ヲ曉シテ其旨
 カ之ヲ廢スルニ限局スルモノハ法ハ人情ヲ曉シテ其旨カ之ヲ廢スルニ限局スル
 カ其旨カ之ヲ廢スルニ限局スルモノハ法ハ人情ヲ曉シテ其旨カ之ヲ廢スルニ限局
 カ其旨カ之ヲ廢スルニ限局スルモノハ法ハ人情ヲ曉シテ其旨カ之ヲ廢スルニ限局

保護の家人家族の關係に於ては、其の事實上の關係を多量に考へ、其の人情を遺
 俗の社會の事情に於て之を考慮スルモノト云フべき也。我國舊來の慣習に於て之の
 點を考へ、吾人の婚姻に於ては、其の目的を以て、其の家族の利益に於て之を考
 へ、之の許しを以て、明文に見出さず、其禁止の條文を以て、其の目的を以て、其の
 二條及七百五十條の明文を見出さず、其禁止の條文を以て、其の目的を以て、其の
 對して、其の婚姻の關係に於て、其の目的を以て、其の禁止の條文を以て、其の
 餘を以て、其の婚姻の關係に於て、其の目的を以て、其の禁止の條文を以て、其の
 之を吾人積極論の要旨とす。其の事實上の關係を多量に考へ、其の人情を遺
 俗の社會の事情に於て之を考慮スルモノト云フべき也。我國舊來の慣習に於て之の
 點を考へ、吾人の婚姻に於ては、其の目的を以て、其の家族の利益に於て之を考
 へ、之の許しを以て、明文に見出さず、其禁止の條文を以て、其の目的を以て、其の
 二條及七百五十條の明文を見出さず、其禁止の條文を以て、其の目的を以て、其の
 對して、其の婚姻の關係に於て、其の目的を以て、其の禁止の條文を以て、其の
 餘を以て、其の婚姻の關係に於て、其の目的を以て、其の禁止の條文を以て、其の
 又同條師批評、第七百五十條の家族の婚姻の關係を以て、其の目的を以て、其の
 之を吾人積極論の要旨とす。其の事實上の關係を多量に考へ、其の人情を遺
 俗の社會の事情に於て之を考慮スルモノト云フべき也。我國舊來の慣習に於て之の
 點を考へ、吾人の婚姻に於ては、其の目的を以て、其の家族の利益に於て之を考
 へ、之の許しを以て、明文に見出さず、其禁止の條文を以て、其の目的を以て、其の
 二條及七百五十條の明文を見出さず、其禁止の條文を以て、其の目的を以て、其の
 對して、其の婚姻の關係に於て、其の目的を以て、其の禁止の條文を以て、其の
 餘を以て、其の婚姻の關係に於て、其の目的を以て、其の禁止の條文を以て、其の

行為ヲ實行スルコトヲ謂フ然レトモ此行為ハ日日之ヲ反復續出スルコトヲ要
 スルコトヲ唯何時タリトモ隨意ニ之ヲ爲シ得ルモノト云フハ狀態ニ存スルコトヲ以テ是レト
 トス例ヘハ貨物ヲ蓄積セル倉庫ノ鍵ヲ所有スルカ如ク又Ocupatioハ占有主ノ物
 件トノ直接ノ關係ヲ必要トセザルヲ以テ奴隸家子等ヲ以テ代表セザルモノト
 得第二ノ元素タルNecessitasハ物件ヲ以テ己ノ所有ニ屬スルモノト確信シ自
 ラ其所有主ト爲スル意思ナラズ以テ物件上ニ施ス所ノ行為ハ主人タル名義
 ヲ以テシテ所有主トシテ行動スルコトヲ要ス故ニ物件上他人ノ優等ナル權利ヲ
 認ムルモノ例ヘハ物件ノ寄託ヲ受ケタル者家屋ヲ賃借シタル者ノ如キハ單純
 ナル物件ノ抑留者ニシテ占有者タルヲ得ずAnimusハOcupatioニ異ナリ物ノ占有
 者自身ニ附隨スルカ故ニ占有ハ他人ノOcupatioヲ藉リテ得取ルモノト得ルモ
 決シテ自己以外ノAnimusヲ以テ之ヲ得ル能ハス故ニ奴隸家子タリトモ主人家
 父ノAnimusニ代ル能ハス又狂人ノ如キ意思ナキ者Animus又有テ無ク雖ハ
 物件ノ占有ヲ得シテ欲セバ此兩元素ノ併立ヲ要シ其ノ缺如ハOcupatio
 無クテ現ニ物件ト共ニ有形上關係シテ在ルニ或ハ物件ノ其事有テルモノキ

狀態ニ在ルヲ以テ足リトシテ其面然ク *Animus* 而於テ他占有者ノ或ハ物件ヲ拾取
 ル者自己ノ占有ト爲スニ在リ或ハ第三者自己ノ所有スル物件ヲ以テ占有者
 ノ爲メニ己ノ *Animus* ヲ讓與スルノ意ヲ含蓄セル法律行為即チ正當運向 *Contra*
bonam fidem 因リ占有ヲ得タルトモ然ラズ存在者ハモテト看做スモノトス此正當運
 向トハ買賣贈與遺贈等ヲ指シ聞スル所ハ其當時ニ於テ舊占有者自己ノ *Animus*
 ヲ讓與スルコトニ在ルト新占有者ノ所有權ヲ得取スルノ意思アリタルトモ
 之果シテ新占有者ヲ所有權ヲ得タルヤ否ヤ又聞ハス單ニ之ヲ得ルモノハ其
 意思ノ存在スルトモ之ヲ以テ占有ヲ得ルニ足ルモノトス、
 占有ノ喪失ハ又兩元素ノ一或ハ兩者共ニ消失スルニ因リ起ルモノトス *Corpus*
 及ヒ *Animus* 兩元素ノ消失ハ物件ノ破滅或ハ占有主ノ好意之ヲ他人ニ讓與ス
 ルトキニ現ハルモノトモ之ヲ單ニ *Animus* ノ消失ハ占有者ノ物件ニ對シ主人
 ノノ狀態ヲ放棄シテ他ノモノニ例ハル物件ノ他人ニ讓與シタル後向キ寄託者債權
 者ノ名ヲ以テ之ヲ扣留スルモノニ在リ又單ニ *Corpus* ノ消失ハ物件ノ他人ニ讓
 與スルモノトモ之ノ如キ然ラズ千或場合ニ於テ *Corpus* ノミノ消失ニ因リ占有者

失ハス *Animus* 一箇ニ據リ之ヲ保存スルコトアリ例ハ奴隸又ハ番人ヲ以テ
 守ラシムル家屋ニ於テ其奴隸又ハ番人ノ之ヲ放棄シタルノ事實ニ因リ占有ヲ
 失フコトナキカ如シ然レトモ第三者ノ之ヲ占領スルニ及ヒテ始メテ占有ヲ失
 フモノトシタルカ其後占有者第三者ノ占領ヲ知リタル後之ヲ驅逐セスシテ放
 棄スルニ非ザレハ占有ヲ失フコトナレト爲シタリ此規則ハ初メ羅馬法ニ於テ
actus liberis et castri ト名ケラレ冬期又ハ夏期ノ間ニ使用セラルル牧場ノ土
 地ニ於テ採用シタルカ共和時代ノ末ニ至ラテ伊太利ニ於テハ小耕作ハ漸次
 消滅シ大所有ト爲リ私人及ヒ市街等アベキシ *Alpe* 山ノ兩側ニ廣大ナル牧場
 ヲ有セシカ伊太利ノ氣候トシテ冬期ノ季候ヲ避ヒ獸群ヲ移往セシメタルカ
 タタルヲ以テ一處ヨリ他處ニ移ルノ間若シ占有ノ繼續セザルモノトモ其占有
 者ハ容易ニ奪奪者ノ爲メニ占領セラルル危険アリタルコトヲ避ニ此等ノ土地ハ
Animus ノミヲ以テ其占有ヲ保存スルコトト爲シ其後教皇時代ノ頃ニハ弗除外
 タリシ規則ハ一般ニ不適用ニ適用セラルルニ及ヒテ其後ノ時代ノ頃ニハ弗除外
 羅馬人ノ常務ノ觀念ニ依レン占有ハ有形的ノ原素ヲ必要トスル所以ヲ唯テ有

物ノノニ適用スルヲ得ク無體物ニ適用スルニモ同シト論決セ隨テ地
役權相繼價權ノ占有ノ問題ト爲ルヲ察サテリシモ理論上此ノ如キ區別ハ辨明
シテカラサル所ニシテ例ヘテ地役權ニ於テハ所有權ニ於ケルト同シク有體物
上ニ實行スルニキ權モシテ或ハ之ヲ通過シ或ハ汲水シ或ハ畜群ヲ牧スル等現ニ
直接接觸ヲ爲スヲ行爲タルヲ以テ恰モ此等ノ權利ヲ占有スルカ如シ其他相繼
權ニ於テモ亦同一ノ名アリ是ヲ以テ推テハ此等權利ノ所有權ト均シク占有ノ
目的タルヘキハ疑フヘカラサルモ羅馬人ノ論理ハ此ニ出テテリ故カザレトモ
此ノ邊ニ地役權ノ占有タルヘキヲ認知シ之ヲ以テ準占有(Quasi Possessio)ナル名
義ヲ下シTentidianaナル訴權ヲ以テ之ヲ保護スルハ終リタリ相繼權ノ關係ハ當
然ニ於テハ市民法ハ其占有ノ目的タルヲ許シタルニ相繼權ヲ以テ無體物ト爲シ
タル以來之ヲ排斥シタリ又價權ニ於テハ總ニ占有ト爲テハ其類ノトシテ看
做サレタルコトナシ

第三章 所有權得取ノ方法

所有權得取ノ方法ハ所有權ヲ得セシムヘキ法律行爲ヲ謂フ羅馬法ニ於テ取
多ノ方法アリ之ヲ大別シテ(1)市民法或ハ通民法ニ得取方法トシテ其唯ノ羅馬公
民等ノニ適用スルニキカ或ハ何人ノノトモ應用スルニキカ立テタル區別ナ
クトモ非僑民ノ消失後ハ復々其目的ナシ(2)根元又ハ分レタル方法トハ物件ノ
所有ハ何人モ專屬セザリシト既ニ屬シタリシトニ從ヒ立テタルモノイテ表面ニ
テ根元ノ方法ハ先占(Ocupatio)イミシテ他ノ方法ハ曾分トモ稱スルナリ(3)新
舊兩所有者ノ間意思ニ合同アリタルト否トニ從ヒ隨意又ハ不隨意ノ方法トモ
之ヲ分ツモノナリ(4)普通名義又ハ各別名義ノ得取方法トモ其資產ノ各部又ハ
其數部分タル名ヲ以テスルト物權各箇ヲ指名シタルトニ從ヒ立テタル區別ナ
クノ之ヲ各自諸種ノ方法ニ就テ陳述セン

第一節 先占 (Occupatio)

先占トハ私人ノ所有ト爲ルヘキモノニモシテ從來何人モ專屬セザル物件ヲ占有
シテ固ク其所有權ヲ得ルモノナリ進化シタル社會ニ於テハ先占ノ有效用ニ當
ルモノハ少シ

留スル物件例ニ於テ其記ニ於テ與單ニ心算ニ附加スル引渡ヲ爲シ且其記物
 ヲ運付ル更ニ其引渡ヲ受ケルヲ要セシメ其地ノニ指シテ (Transitio juris
 引渡ニ於ケル第二ノ心算トシテ) 一方ヨリノ讓與者ノ意思他方ニ向テ之ヲ
 得取スルノ意思ヲ要ス此雙方ノ意思 (Intentio Transiens) 其他ノ讓與
 的得取ノ方法ニ於テハ等シク存在セザルモノトシテ In jure cessio ニ於
 テハ當事者間意思合同ノ明白ナル得取者カ高聲ニ市民法ニ從テ所有權者
 宣言ヲ讓與者カ之ニ服從スルヲ以テ確實ナリトシ之ニ反シテ引渡ニ於テ實
 讓者ノ意思右兩方法ノ如ク有形的ニ明カニ示スルニ雖モ其讓與得取ノ意思
 再存在セザルヘカヲ要シ而シテ引渡ノ單ニ蓋印押留 (Cadastrata) ナク或
 與ナルカヲ區別スルニハ引渡ニ先スル所ノ行為ニシテ正當理由 (Iusta causa) ナル
 モノアリ而シテ引渡ハ正當理由ノ實行タルニ在リ是ヲ以テ之ヲ觀レハ正當理
 由ハ或ハ買賣交換贈與其他ノ義務タルコトヲ得ヘク若シ其目的物件ノ所
 有者ニシテ物件ノ所有權ヲ移轉スルホク承讓スル者ハ現存ノ所有主ト稱
 索テ所有主トシテ間接所有權ノ移轉ヲ實行セザルヘク法律上ノ關係ヲ生シ又

所有權ノ移轉ヲシテ實行者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシ
 之ニ羅馬法ニ於テハ近世法律ニ異ニテ所有權ノ移動無異ニ契約ニ因リテ成立セ
 ズ引渡ニ因リテ始テ成就シタルモノトシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシ
 其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシ

第五節 時效

(Usucapio et prescriptio longi temporis)

(A) 時效 (Usucapio) 一ノモノヲ他モノトシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシ
 時效トシテ us capere 即チ使用ニ因リ得取スルモノトシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシ
 ヲ用テ應用セラレタルモノトシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシ
 有テ因リ所有權ヲ得取スルノ方法ナリ既ニ番人ノ知ヤ如ク Desumptio 蓋シテ其所有權者トシ
 純ナル引渡ヲ以テハ其所有權ヲ移スコト能ハズ市民法ニ於テ之ヲ代シテ又其所有權者トシ
 ナ法律官ノ之ヲ以テ物件ノ緊縮中ノモノトシテ In bonis habere 保護スルモノトシテ其所有權者トシ
 カ若シ此方法ニ依リ讓與ナレバ物件ノ時效在規期ニ從テ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシ
 市民法ニ於テ之ヲ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシ
 善意 (Bona fides) ヲ以テ物件ノ讓與ヲ受ケルモノトシテ其所有權者トシテ其所有權者トシテ其所有權者トシ

トラシト時ニ於テ讓受者ハ直チニ所有主ト爲ルモト雖モ然レドモ何人ト雖モ己ノ所有セタルモノヲ人ニ與ケルモ亦爾レトモ一定ノ時間占有ノ後時効ヲ以テ所有權ヲ取得スル場合ニ於テハ時効ハ儀式的ノ所有權ノ移轉方法カ必要トスル煩苦ヲ避ケルヲ得セシメ市民法上之通融ナル原則ヲ補正スルコトヲ得セシメ然レトモ第二ノ場合ニ於テハ時効之ニ異ナリ真ノ所有主ハ不知ノ間ニ其權利ヲ侵害セラレタルヲ以テ時効ニ對シテ其ト爲リ其存在スル理由ヲ辯明スルコト難キカ如キノ外觀アリトモ此第二ノ場合ノミハハシメテニアンノ法律上ニ存シ又近世ノ法律皆之ヲ採取シ法律上最重要ナル得取方法ノ一トシテ崇信セラレハ他ニ理由ノ存スレハナリ蓋シ上說セル如ク一ノ所有主ニシテ不知ノ間ニ物件ノ占有ヲ喪失シナカラ必要ナル時間内ニ之ヲ請求セタルハ異常ノ形勢ノ之ヲ幫助スルニ非サレハ見ルヘカラナル稀有ノ例ニシテ而モ之ニ因リ其所有ヲ喪失スルハ時効ヲ中斷スヘキ時期内ニ於テ之カ手段ト爲ラス遂ニ時効ヲ完成セシムル過意ヲ責ム自ラ之ヲ負ムナルヘカラス且チ此ノ如キ所有主ニシテ正當ノ方法ヲ以テ占有ヲ得外觀所有主

トシテ十分繼續者ハ年月ノ間之ヲ享有シタル者ニ對シテ亦紛々間得取ヲ請求セシムルヘ公正ナル理論ノ容ヲ所ナリ若シ然ラズトセンカ占有權ハ平穩ニ成立スルコト能ハス常久訴訟問題ト爲リ社會ノ平和ヲ擾亂セシメ加之時効ハ又眞正ノ所有者ヲシテ其權利ヲ證明スルニ必要ナル證據ヲ得易キトシテ何トシテハ既往ニ遡リ一ノ所有者ハ正確ナル權利ヲ有シタルノ證據ヲ屢舉スルノ勞ヲ省キ正當理由ニ因リテ物件ヲ得取シ一定時日間之ヲ占有セシコトノ證據ヲ以テ所有權ヲ確定ス故ニ時効ノ所有權ノ證據トシテ便宜ヲ與フベシト恰モ上文ノ陳述セル占有ニ於テハ同一ノ趣アリ

第三ノ場合即チ讓與者ノ所有主ニ非ザリシトモ於テ時効ノ適用ヲ得ルニハ(一)正當理由(Dogana)ヲ以テ占有ヲ得タルコト(二)讓受者ハ善意(Bona fide)大ニシト(三)一定時日間占有ノ繼續(四)物件ノ時効ヲ受ケ時ヲ以テ(五)四箇ノ條件ハ必要トスルベシ

(一) 正當理由(Dogana) 其正當理由トモ物件有形的ナル交付以外ノ事故ニ因テ占有ノ繼續ヲ妨礙スル形之ヲ先手ノ所有權法律行為ナリ此法律行

爲ドハ買買與與據實約定通則判決等ニシテ其他所有權得取リ包含スルニ
 付テハ非違ニ爲ケル下其趣旨同シクハ其時効ニ於テハ包含地トシテ物件ヲ交
 付シタルハ其趣旨セシメ若シ其間或障礙ナクハ所有權ハ直チニ移歸シタ
 ルモ大抵ハ其趣旨ヲ以テ使用貸借既實質借ノ如キ所有權移轉ヲ包含セ
 タルモノニシテ其趣旨由ラ成ヌコト雖モ其趣旨ニ依リテ其趣旨ハ包含セ
 (二) 善意(Bona Fide) 善意トハ誤謬ニシテ得取者カ自ラ所有主ト爲ルコトヲ得
 ルハ條件ニ於テ物件ヲ得取シタルト思惟シタル誤誤ノ信用ニ在リ此誤信ハ讓
 與者ノ物件所有主トシテ所有主トシテ信シ又ハ其讓與ノ能力カカラシ
 ニ之アリト信シタルニ因ルモノニシテ真正ナル情實ノ不知ニ在リ而シテ此不
 知ノ情實ハ必ス事實上ノ問題ニシテ法律上ノ問題ニ涉ルルカラズ又善意ハ必
 ス讓受者カ占有ヲ受ケシ當時ニ存在モナルヘカラス然レドモ其以外ノ時ニ存
 在スルコトヲ望マヌ是ヲ以テ讓受者カ占有以前物件ヲ讓與者ヨリ他ニ屬セシ
 ヲ知ラシモ占有時ニ於テ其讓與者カ其所有權ヲ得タルモノト信シテ占有後
 讓與者ノ無權方者トシテ其讓與者カ其所有權ヲ得タルモノト信シテ占有後

報

○最近判例要旨彙報

九六 指名債權ノ讓渡ト確定日附アル證書 指名債權ノ債務者カ一旦債權
 讓渡ノ通知ヲ受ケ若シハ之ヲ承諾スルトキハ確定日附アル證書ノ有無ニ拘ハ
 ラス讓受人ト自己トノ間ニ債務關係存立スルヲ以テ他ノ同一ノ債權ヲ主張ス
 ル者アラハ之ヲ排斥スルノ權利ヲ有ス(大正判例三三六號(三)年四月十八日第
 一民事部) 債權ノ讓渡ノ通知ノ有無ニ依リテ其債權ノ存立ハ其債權ノ讓渡ノ
 九七 廢嫡自由ノ舊慣 嫡子相続又ハ嫡孫承継ノ相續ハ我邦古來普通ノ慣
 例ナリト雖モ明治五年戶籍法改正施行以前ニ在リテハ士族以上ハ特別平民ニ
 至リテハ一家維持上其他ノ事由ニ因リ嫡子又ハ嫡孫ヲ差指キ他ノ卑屬親等ヲ
 以テ家督相續人ト爲シ又ハ家督相續ヲ爲サシムル始キハ一ニ被相續人ノ自
 由ニ在リテ親權ノ協議若クハ官廳ノ許可ヲ必要トスルカ如キ法度又ハ債行ア
 ルコトナシ(大正判例三三十五號(三)年三月十四日第一民事部判決)

九八、未成立ノ會社ノ爲メニ行爲ニ依リ成立スル會社ノ爲メニ締結
 スル契約ハ其會社ノ成立ヲ條件ト爲シタル契約ト外ナラズシテ新ル場合ニヤ
 其利益ヲ享受スヘキ第三者ハ其契約當時必スシテ現存ナルモノト認事スルヲ以テ
 十五(明治三十六年三月十三日第一民事部判決) 又ハ(明治三十七年三月十三日第一民事部判決) 九九、不拂込ノ株式ノ所有者ハ商法第五百五十三條第一項ハ會社未開張前百
 五十二條ニ定メタル手續ヲ踐ミタルモ株主カ株金ヲ拂込ラズ爲メテハ株
 主ヲシテ會社ノ利益ノ爲メニ其株式ヲ失ハシメ而シテ會社ハ其各債權人ニ對
 シ拂込ノ催告ヲ爲シ最先ノ拂込者ニ其株式ヲ取得セシメ若シ其各債權人ハ拂
 込ヲ爲ササルトキハ之ヲ競買ニ付スル目的ヲ以テ一時之ヲ取得スルモノト認解
 釋スルヲ相當トス(明治三十七年三月二十八日第一民事部判決) 一〇〇、商法第五百五十三條ノ規定ハ拂込ノ義務ヲ怠リタル株主ニ對シテ制裁ナリテ以
 テ其株式ハ當然會社ニ歸屬スルモノトス故ニ競買ノ結果溢納金額ヲ控除シテ
 餘利ヲ生シタル場合ニ於テ會社カ其金額ヲ利得スルハ畢竟法律ノ規定ニ因ル
 モノナレハ之ヲ目シテ不得利得ト謂フヲ得ス(明治三十七年三月二十八日第一民事部判決)

第十六年四月十八日
 第一民事部判決

一〇〇 新株募集ト株金拂込ノ拒絶 株式會社カ資本ヲ增加スルニ方リ總
 株數ノ引受ナキ場合ニ於テハ會社ハ豫定ノ資金ヲ得ル能ハス應テ豫定ノ目的
 ヲ達スルヲ得タルニ因リ株主モ亦豫定ノ利益配當ヲ得ルノ理ナキニ至ルヲ以
 テ既ニ引受ヲ爲シタル株主ニ於テモ其拂込ヲ拒絶スルノ權利ヲ有スルモノト
 ス(明治三十六年二月二十九日第一民事部判決) 一〇一 訴訟進行中ニ於ケル債權讓渡ノ通知 債權ノ讓渡ニ於ケル債務者
 ノ承諾若クハ通知ナルモノハ權利ノ行使ニ關スル要件ニ外ナラスシテ其成立
 ニ關スルモノニ非サレハ縱令起訴ノ當時ニ於テハ未タ債務者ノ承諾若クハ通
 知アラスシテ訴訟進行中讓渡ノ通知アリタリトスルモ裁判所ハ其判決當時ノ
 情態ニ依リ債務者ニ對シテ敗訴ヲ言渡スヘキモノト爲ス(明治三十六年三月
 十六日第一民事部判決) 一〇二 訴訟行為追認ノ效力 後見人カ親族會ノ同意ヲ得スシテ被後見人
 ノ爲メニ訴訟ヲ提起シタルモ第二審ニ至リ親族會ノ追認ヲ受ケタルトキハ既

往ノ欠缺ハ之カ爲メニ補正セラレ其訴訟行爲ハ當初ニ適ソテ有效ナリト云
(明治三十六年四月十五日第一民事部判決) 會ノ同進ノ辯スルニテ辯論員ハ
 一〇三 競賣法ニ依ル再競賣ト不足額請求權者 競賣法ニ依ル競賣ニ於テ
 前ノ競賣人カ民事訴訟法第六百八十八條末項ノ命スル負擔義務ヲ履行セザル
 トキハ競賣法第二十七條ノ規定ニ於ケル利害關係人ハ該競賣人ニ對シ強制執
 行ヲ爲ス爲メ直接ニ訴ヲ提起シ得ヘキモノトス(明治三十五年(子)第六百六十
 七號第一民事部判決)
 一〇四 共犯ト通謀 或者カ犯罪ヲ行フノ事實ヲ知リ他人カ其犯罪行爲ニ
 干與シタルトキハ即チ共犯ノ關係ヲ生ス隨テ必スシモ其共犯者ノ間ニ犯罪ヲ
 行フニ付キ通謀ノ事實アリタルコトヲ要セス(明治三十五年(子)第六百七十
 三號第二刑部宣言)
 一〇五 欺罔ト其方法 刑法第三百九十條ノ欺罔トハ偽言其他他種ヲノ方法
 ヲ以テ人ヲ錯誤ニ陥ラシムルノ謂ナリトス隨テ其方法ニ何等ノ限定アルコト
 ナシ(明治三十六年(子)第三十三號第一刑部宣言)

(注 意) 校外生月謝納付ノ際ハ必ス本紙ヲ切取キ居所、氏名及爲替書號、金額、並ニ月謝ノ月
 別若クハ何月分ヨリ何月分迄ト記入シ爲替券ニ添附スルモノトス

納付書

爲替書號

一金

但三十六年度高等科 月分月謝

右納付候也

居所

明治三十六年 月 日

和佛法律學校會計局御中

納付書

爲替書號

一金

但三十六年度高等科 月分月謝

右納付候也

居所

明治三十六年 月 日

和佛法律學校會計局御中

法學志林

毎月一、四、十五日發行
一冊毎部銀共金九錢

第四十二號

(五月十五日發行)

志林

○邦行法上國道會社、鐵山會社其他不獨會社ノ
 株主タル外國人ノ債權ニ對シテ外國人ニ對スル土地
 所有ノ權利ノ行使スル點ニ付テ(總論) 法學博士 藤田次郎
 ○最近判例批評(其八) 法學博士 藤田次郎
 ○株式會社ノ合算シタル管業權ノ附加税ニ付テ 法學士 若槻禮次郎
 ○「バルチオン」式賣入票別法ニ就テ 法學博士 岡田朝太郎

纂論

○取引所(續)
 ○銀行預金前債權者ノ賣入票ニ關スル事出ニ因リ
 行不能ト認テ賠償請求權 法學士 田代律雄
 ○原給の株主ヲ拂込テ爲ササルニ因リ權利ヲ失ハ
 タル場合ニ於テ之ヲ株式處分ノ方法 法學士 松木丞治

解疑

○東京訴訟法第十七條ノ特別裁判籍ト選擇テ許サ
 スル物件
 ○東京訴訟法第七百四十四條ト第三債務者
 ○債權者力債務者ノ第三者ヨリ受テヘキ不動産ニ
 關スル假令ノ手續 以上三編 法學士 岩田一耶

其他

判例、雜報、記事 數十件
 發行所 **和佛法律學校**

明治三十六年五月三十日印刷
 明治三十六年五月卅一日發行
 (定價金貳拾五錢)

編輯者 萩原敬之
 發行所 東京市牛込區牛込北町十番地

印刷者 小宮山信好
 東京市牛込區矢來町三番地

印刷所 金子活版所
 東京市芝區西ノ久保町番町十一番地

發行所 司法省 指定 **和佛法律學校**
 東京市麹町區富士見町六丁目十六番地
 (電話番町百七十四番)

(明治二十二年十二月九日內務省許可)
 (明治三十五年十一月四日第三號郵便認可) 毎月廿一、四、三日、五日、六日、八日、十日、十一日、十二日、
 十三日、十五日、十六日、十八日、廿一日、廿三日、廿五日、廿六日、廿七日、廿八日、廿九日、三十日發行)